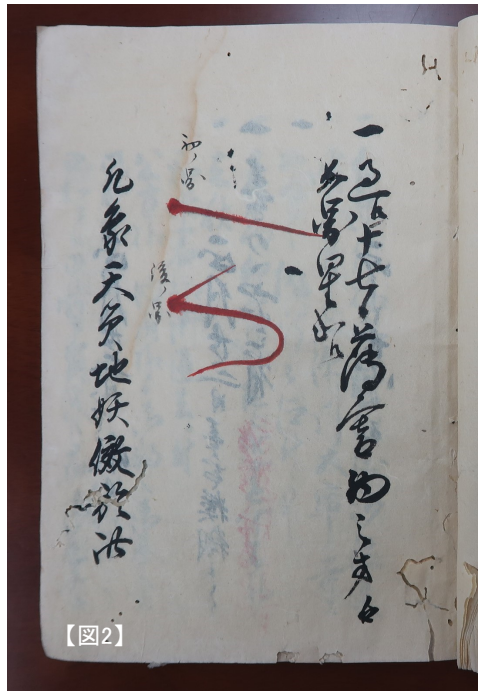
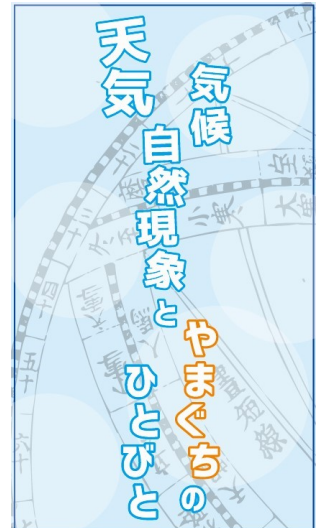


【図1】



【図2】



＊14

【図1】「密局日乗」文化4.9.4条 右：【図2】「同」天保2.1.21条(毛利家文庫19日記18)

自然現象①

彗星・流星・日食と文書館資料(1)

《各地に残る近世天文史料》

大崎正次編『近世日本天文史料』(原書房 1994年)は、江戸時代の天文現象に関する史料を、日食、月食、流星、彗星といった類別にまとめ年代順に紹介した研究書です。個々の現象につき解説も付され、概要を知る上で便利です。また、全国の博物館、文書館・公文書館などが、江戸時代の天文現象を記した史料を紹介する展示を行い、その展示資料をウェブサイトで紹介しています。各地に残る史料を知る上で参考になるものです。

当館所蔵資料にも、江戸時代に目撃された彗星、流星、日食などの天体現象を記したものがあります。そのほとんどはこれまで注目されていないものです。今年のアーカイブズウィークにあわせて、把握できた記事の概略を文書ごとに紹介しましょう。

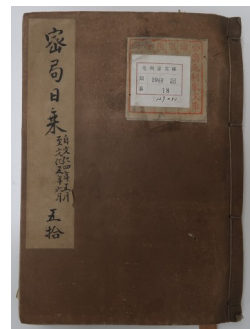
《1. 「密局日乗」》

「密局日乗」は萩藩密用方の日記です。明和2年(1765)から慶応元年

(1865)まで129冊が残ります(毛利家文庫19日記18、欠年有)。密用方は藩主や藩重役の指示を受け、先例、毛利家の歴史、家臣の由緒などの調査を行ったり、特命による記録作成などを担当した役所です。ところが「密局日乗」には、業務とは直接関係のない、藩内でのふしぎな出来事、自然現象、風聞などの記事も収録されています。その中に天体現象に関する記事8つを見つけることができました。

最初の記事は享和元年(1801)2月4日条、「今夜星月ヲ貫ク、月光常ニ変リ、暫シテ星スリ違ヒ候」です。「今夜星が月の前を通り過ぎた。月光是通常とは異なるようすで、しばらくして星が月とすれ違った」という意味でしょうか。

また、目撃した星を描いた図のある記事も2つあります。文化4年(1807)9月4日条には「此内ノ申ノ方ニ當暮過ル異星 頭、五ツ時頃西ノ方へ入、彗星或稲星、形凡左之通」と記され【図1】が描かれ、



「密局日乗」

「密局日乗」には、藩内で目撃されたふしぎな動物に関する記事(例えば萩越ヶ浜に打ち上げられた怪獣の話や三隅村野波瀬で打ち殺された「おとせい」など)もあります。これらについては平成27年度アーカイブズウィーク「文書館動物記」解説シートNo.22『「密局日乗」の中のふしぎな動物たち』で紹介しています。当館ウェブサイトからご覧いただけます。

天保2年(1831)1月21日条には「過ル十七日薄暮、西之方江如凶星出ル」とあり、【図2】が描かれています。【図2】には「初ノ凶」「後ノ凶」とあり、星の動きも伝えています。天保6年8月25日条にはハレー彗星の記事があります。そのほか、文政2年(1819)5月23日条、同4年4月25日条、同8年6月29日条、天保7年7月8日条にも天体現象に関する記事があります。

《2. 毛利家文庫「17年表」》

毛利家文庫「17年表」は、江戸時代に作成された各種年表を集めた項目です。各年表の性格は、藩庁諸役所が業務上作成したもの、個人がまとめたものなどさまざまです。このうち4点に彗星記事などを確認できました。

(1)「毛利家年表」(17年表43)

享保17～天保7年(1732～1836)の年表です。「嘉永三庚戌秋写之 典雅堂秘蔵」とあるので、個人編纂の年表を嘉永3年(1850)に写したもののようです。これには元文2年(1737)1月に「彗星西方ニ出ル」とあります。今回把握した限りでは当館資料中もっとも古い彗星記事になります。これを含め9つの記事がみえます。

文化8年(1811)には「八月二日、彗星、北斗ヲ貫出」とあります。フラウゲルギユウス彗星です。3つの記事が載る天保2年には、1/17「西方珍星出、又銀雲人の字の如し」、3/29「夜中光物不絶、有明の如し」、4/6「日輪三体、出頭如し」とあります。「日輪」とは太陽の周囲に生じる光の輪、日暈(にちうん)です。

ほかには寛保2年(1742)1月、同3年11月、明和6年(1769)、文化4年に記事があります。

(2)「草舎年表」(17年表37)

文禄4～天保14年(1595～1843)の記事を載せる全15冊の年表で、草刈泰彦が編纂したものです。この中に天文現象に関する記事6つがあります。もっとも古い記事は元文2年1月ですが、その内容は(1)と同じです(右写真)。典拠史料が同一なのかもしれません。

文化8年8月条に「全月上旬より西北ニ当り流れ星出る、少し引き有之、俗説稲星といふ」とあるのはフラウゲルギユウス彗星、天保6年8月23日条の「此頃彗星西方ニ見ゆ、尤宵の内穂先東へさす」はハレー彗星の記事です。ほかに寛保2年1月、同3年11月、明和6年に記事があります。

(3)「年表」(17年表41)

明応6～安政6年(1467～1859)の年表です。大正7年(1918)に毛利家が児玉愛二郎(元長州藩士・宮

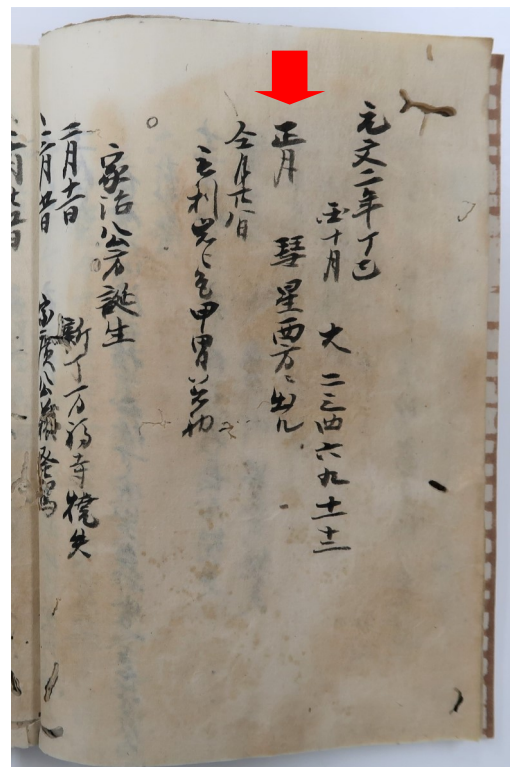
内省図書頭)から借り受け謄写したものです。明和6年と安政5年8月19日条に彗星記事があります。後者は、非常に明るく長期間にわたって観測されたドナチ彗星に関するもので、「八月十九日頃ハ長星又ハスイ星共申星、宵ニ西ノ方山端ニ見、次第ニ高く成、南方へ寄、九月十八日頃ニ消」とあります。

(4)「御家年表」(17年表46)

明応6～天保7年の毛利家及び防長両国の諸事件を年別に記載する年表です(『毛利家文庫目録』)。天体現象に関する記事は、文政8年(1825)8月、天保2年、同6年8月の3つが確認できます。

文政8年の記事は「八月彗星出ル」「八月夜明ノ明星三ツアラハル」とあります。この年の彗星については、『近世日本天文史料』に「大彗星、昴宿・畢宿の間に出現、九月末に及ぶ」との綱文が立てられ、多数の史料が紹介されています。各地で観測された彗星のようです。

天保6年8月の記事はハレー彗星に関するもので、「八九月、孛星乾方出現、中国洪水」とあります。「孛星(はいせい)」とは帚星、彗星の異名です。彗星出現が中国での洪水発生という凶事と関連づけて記録されています。



「草舎年表」元文2年正月の記事